

東日本大震災 岐阜民医連支援ニュース

=ここは一つ、オール民医連で全国の仲間とともに困難を乗り越えよう!=

NO. 22

2011. 4. 19 岐阜民医連支援対策本部

5月以降の支援方針決まる！

昨日、5月以降の全日本民医連の支援方針が決定し提起されました。5月からの支援の基本は、救援から地域の医療と介護の再生、地域の再生のための長期支援となります。事業所の医療支援や松島支援、宮城野の里の介護避難所支援は4月末で収束し、今後は避難所の巡回、地域訪問を中心とした支援となります。また、支援規模も縮小し、地協単位で支援者数を調整して派遣することになります。具体的には、医師1名、看護師2名、事務その他1名の4名のチームを恒常に1チームを東海北陸地協で受け持つことになります。また、金・土曜日に地域での相談・訪問行動を集中的に実施するために各地協から3~4名派遣することとなります。

岐阜での対応としては、医師・看護師含むチームの派遣は5月20日以降で医師・看護師の体制をみながら調整中です。金・土の集中支援は、5月13・14日を岐阜で担当(12日出発 15日帰任)します。すでにグループホーム北山から2名の希望がありますので残り2名の募集を行います。

希望者は担当管理者を通じて土井まで連絡ください。

関Dr2度目の支援に！友の会佐野さんは本日帰任！

昨日、関医師が2度目の支援に全日本民医連定期便を利用して現地に入りました。22日まで現地で活動し23日に帰任の予定です。また、16日から高速バスを利用し、独自に現地支援を行っていましたがねだ診療所の友の会事務局の佐野さんは本日帰任の予定です。

支援募金（義捐金）の扱いについて

全日本民医連に1億9千万円を超える義捐金が届けられています。下記の方向で役立てることになりました。

＜県連・事業所を通じて寄せられた義捐金＞

- ①被災した各県の「義捐金配分委員会」を通じて被災者に直接お届けする
- ②被災した自治体(この間の支援活動で関わりの深い自治体)にお届けし、
復興に役立てていただく
- ③被災した加盟事業所の復興に役立てていただく
- ④支援物資などの購入に役立てる
(全日本民医連が緊急に購入した医薬品など)

*なお、支援に関わって生じている交通費(支援バスのチャーター費用など)や宿泊費などは、義捐金の活用ではなく、全日本民医連の費用とします。



もしかして佐野さん？

長町・若林地域訪問対策本部の発行している「つなぐ手ねっと」
No18より

今後の支援予定

4月24日(日)~4月30日(土) <宇野予定、須田予定、玄予定>自家用車利用

5月12日(木)~5月15日(日) <林、本田GH北山職員予定>全日本定期便利用

4月16日現在の義捐金集約: 2,228,095円です

シリーズ震災支援報告 8 <支援隊の震災支援報告をシリーズで掲載します。>

午前中には声掛けなどを中心に医療の中で手伝っていた介護系のスタッフ達が何やらモソモソと相談を始めた。それは昼過ぎに一旦病院に帰り、午前の報告を行っている時だった。本部の医師に報告をしているとその介護系の集団から「足浴をやりたい」と強い要望が出た。しかしそれには問題がいくつかあった。水は出る避難所だったが、火などもちろん無い。ましてやコンロも少ないし鍋など救援物資にあるはずもなかつたが、介護士たちは「なんとかする」と言う。しかしその医師の答えはこうだった。「物をなんとかするのは私が責任を持って1時間です。あなたたちはチームを組んでどうするかをその間に考えてまた集まつてください」と。阪神大震災や中越地震で私たちは非常に大きなことを学んでいると思う。この場面でこれほどの決断ができる歴史をもつた組織は多くはないだろう。医療支援オブリーから別の次元にきているとリーダーは察知したのだ。

チームはみるみる活気に満ち溢れていった。午後の出発の時には必要と思われるすべての物が約束通り揃えられていた。きっとその医師の申し出を破って一緒に駆けめぐり回って探していた奴がいたはずだ。

午後の出発の時に本部医師がこう言って私たちを送り出した。

「あなたたちのチームは『何でもやる隊』とします。必要と思われる事を何でもしてください」

多賀城中学に到着すると介護士たちは非常に手際よく準備を始めた。もちろん医師たち医療チームも診療ブースを構える。

さて私はというと、この中学に入る時に中学生と思われる集団を見つけていた。午前中から気になっていたのだが、体操ですっきりとした顔をした人たちの向こう側で黙々とゲームに興じる子供や、ただやることなく座っている子供たちが非常に気になっていたのだが、他県の方も同じだったらしく「サッカーをやらせよう」ということになった。私たちは次々と声をかけ8人の中学生とサッカーすることになった。サッカーボールを用意するといとも簡単に試合が始まった。



誰もいなないまっさらなグラウンドに突然子供たちの声が響き渡る。私ともう一人の秋田民医連の方もこれに加わりボールを追った。(ちなみに彼らは剣道部と卓球部ということで大してうまくなないので、誇らしげに先制ゴールを決めてしまった。反省…)
短い時間だったが、彼らも私たちも思いっきりサッカーをした。訊くと彼らはこの春から高校生だという。しかし「教科書もないし、服も無いし、靴もないや」と笑って話していました。口から出そうだった「頑張れ」という言葉を飲み込んで、私たちは笑顔で「またサッカーしよう」と約束してきました。



外では他にも小児科の医師が子供たちと遊んでいました



こんなおどけた笑顔を見せる子も

みんな何かの役割を見つけてそれぞれが頑張っていました。

… つづく
(戸崎)